

地 芝居の歴史

歌舞伎は近世初頭に、京・大坂・江戸など大都市で盛んになり、元禄期には『地廻りの役者』などと呼ばれる旅興行の歌舞伎が広範囲に行われるようになりました。旅興行を通じて地方に広がった歌舞伎は、やがて享保期には農民などが自分たちで歌舞伎を演じることも始まりました。

農村や漁村で行われた歌舞伎は、地芝居または地狂言と呼ばれ、地方の村々に広がっていきました。その熱狂振りを警戒した幕府は地芝居を弾圧し、しばしば禁止令を出します。寛政の改革・天保の改革などで激しく弾圧されながら、くかくれ踊りく子供手踊りなどの名に隠れて、地芝居は続けられてきました。幕末から明治にかけて最も盛んだったと言われています。地芝居の多くは、神社の祭礼や雨乞い、お盆などに数日間開催され、村の若衆などによって演じられました。その舞台が全国各地に残っています。常設舞台ではない、組み立て式の曳山や山車を舞台にするもの、船を舞台にするものなどもあります。

村社会をとりまく環境の変化の中で、一時途絶えるかに見えた地芝居も、近年各地で人気を回復し、現在全国で130以上の団体が活動中です。その中でも大鹿歌舞伎は、リーダー的な存在として全国にその名を知られています。



大 鹿歌舞伎の主なあゆみ

- 明和4年（1767）大鹿で地芝居が上演された（大河原村名主前島家の作方日記帳に記述）
- 天保15年（1843）大河原下青木の薬師堂前に間口八間・奥行三間という大きな舞台が造られる
- 昭和52年（1977）長野県無形民俗文化財に指定される
- 昭和59年（1984）長野県芸術文化使節団としてオーストリアで公演
- 昭和61年（1986）財団法人大鹿歌舞伎保存会が発足
- 平成2年（1990）第1回全国地芝居サミット大鹿・記念公演とシンポジウムを文化庁の支援を得て開催
- 平成3年（1991）第11回伝統文化ポーラ特賞を受賞
- 平成4年（1992）ドイツで公演（ボン市をはじめ6都市で公演）
- 平成6年（1994）石川文化事業財団より山本有三記念郷土文化賞を受賞（東京カザルスホールにて）
- 平成8年（1996）国選択無形民俗文化財に指定される
- 平成9年（1997）文化庁伝統文化伝承総合支援事業の『大鹿歌舞伎地芝居伝承塾』を3年間継続開催
- 平成12年（2000）3月11日、国立劇場（大阪府）の舞台で大鹿歌舞伎を上演

大 鹿歌舞伎の主な演目

ろくせんりょうごじつぶんしょう 六千両後日文章	しげただやかた だん 重忠館の段
げんべいさきわけつじ 源平咲別躑躅	おおぎや だん 扇屋の段
ちゅうしんこうしゃく まくず 忠臣講釈 幕図	たくべえ じょうし だん 宅兵衛上使の段
すがわらでんじゅてならいかみ 菅原伝授手習鑑	てらこや だん 寺子屋の段
すがわらでんじゅてならいかみ 菅原伝授手習鑑	まつおうやしき だん 松王屋舗の段
おうしゅうあだちがはらにだんめ 奥州安達原二段目	むわとうものがたり だん 宗任物語の段
おうしゅうあだちがはらにだんめ 奥州安達原三段目	そではぎさいもん だん 袖萩祭文の段
いちのたにふたばくんき 一谷嫩軍記	くまがいじんや だん 熊谷陣屋の段
しんれいやくちのわたし 神霊矢口渡	とんべえ すみか だん 頓兵衛住家の段
しんれいやくちのわたし 神霊矢口渡	はちろうものがたり だん 八郎物語の段
かまくらさんだいき 鎌倉三代記	みうらわか だん 三浦別れの段
よしつわこしごえしょう 義経腰越状	いずみさぶろうやかた だん 泉三郎館の段
たまものまえあさひのたもと 玉藻前旭袂	みちはるやかた だん 道春館の段
えほんたいこうきじゆうだんめ 絵本太功記十段目	あまがさき だん 尼ヶ崎の段
けいせいあわのなると 傾城阿波鳴門	じゆんれいうた だん 巡礼歌の段

大 鹿歌舞伎の定期公演日

春の公演	5月3日 正午より
	●大磧神社舞台
秋の公演	10月の第3日曜日 正午より
	●市場神社舞台



■お問い合わせ

〒399-3502 長野県下伊那郡大鹿村大河原391-2
教育委員会事務局または産業建設課観光担当
TEL.0265-39-2100・2001 FAX.0265-39-1023



信州の南端、南アルプスの山麓に位置する大鹿村では、江戸の昔から芝居を愛する代々の村人によって歌舞伎が伝えられてきました。大鹿歌舞伎は山村の暮しに寄り添うように、人々の暮しに溶け込みながら、時代の変化の中で途絶えることなく、受け継がれてきました。

地域が紡ぎ続ける 豊かな文化の絵巻・大鹿歌舞伎

大鹿歌舞伎は、300余年前から各集落の神社の舞台で演じられ、今日まで伝承されてきました。歴史の変遷の中では、江戸から明治初期には歌舞伎上演の禁令は厳しく、その弾圧をかいぐりながら、村人の暮らしの大事な核として脈々と受け継がれてきました。

そして、歌舞伎の上演がなかったのは、終戦の年などわずかであったことを考えますと、大鹿村の地芝居は、隔絶された立地条件とめまぐるしい社会の変化の中で生きてきた、村の人々の心のよりどころであり、祈りに似たものでもあったといえます。

昭和61年に財団法人大鹿歌舞伎保存会が発足し、中学校の歌舞伎クラブや地域の歌舞伎愛好者を中心に保存・伝承が行われています。歌舞伎という芸能を受け継ぎ、地芝居を支えていくことは、大鹿村の人々の熱意と努力がくりあげる、未来に向けての新しい伝統の創造でもあります。

大鹿村では、新緑の春と紅葉の秋の2回定期公演と、国立劇場を始め各地からの招聘に応じての年に何回かの出前公演を行ってきました。大鹿歌舞伎は、地芝居を通して

いきいきとした地域の文化の発信と交流の場でありたいと考えております。



大鹿歌舞伎の育った里は——。

大鹿村は、平安時代から荘園として開発されており、大河原鹿塩という所領の名で「吾妻鏡」にも登場しています。重要文化財に指定されている長野県最古の木造建築である福德寺薬師堂にその歴史の古さが象徴されています。隔絶されたかに見える山間地ですが、古道を通じて都の文化がこの村にも入っていたことが伺われます。また、伊那谷は、民俗芸能の宝庫といわれるほど、多くの祭りを伝え、歌舞伎・人形芝居などが盛んな地域であり、各地に舞台も多く建てられ、三味線を弾き、浄瑠璃を語る人々も多かったといわれています。

大鹿歌舞伎が受け継がれてきた背景には、こうした村の人々の歌舞伎に対する愛着の土壌が豊かに育っていたことが挙げられます。



地芝居の伝承に力を注ぐ浄瑠璃弾き超りの竹本登太夫(片桐登)。

大鹿歌舞伎の心意気——。

全国各地の地芝居を伝える村の中でも、大鹿村はその舞台の数の多さで抜きん出ている。かつて、小さな集落の氏神の祭りに、わずかな戸数の集落だけで歌舞伎を上演できたといわれています。多くの人が歌舞伎を演じ、浄瑠璃を語ったこの村では、村内の13ヶ所に芝居専用の舞台が、神社の前宮などの名で建てられました。耕地の少ない山あいのわずかな平地に生きる村人は、食を切り詰めてまで歌舞伎のための舞台を建立してきました。今も残るその舞台には、大鹿村の人々の心意気と底知れないエネルギーが受け継がれています。

大鹿歌舞伎

桜の花びらが散る中に、おひねりが飛ぶ

大自然に包まれた解放された空間の中で、まさに古来の観劇スタイルそのままに、境内にゴザを敷きご馳走を食べ、酒を酌み交わしながら芝居を楽しむ。大きな見得や力のこもった所作が続くと、声援にも思わず力が入り客席がどっと沸きます。舞台と客席が一体となり、地芝居の何ともいえない魅力が生まれます。芸能の原点である「心と心が触れ合う場」を生み出す大鹿歌舞伎の舞台には、熱く、豊かな地芝居のいのちが脈々と息づいています。



国立劇場での晴れの舞台は大成功。



地芝居で初めて、国立劇場の舞台上で

平成12年3月11日に、地芝居として初めて国立劇場(大阪府)で大鹿歌舞伎が上演されました。大鹿村にのみ伝わる演目「六千両後日文章重忠館の段」が上演され、地芝居の素朴な魅力で歌舞伎ファンを魅了しました。

回り舞台・太夫座・奈落を備えた歌舞伎舞台

大鹿村のある伊那谷は昔から伝統芸能の盛んなところでしたが、特に大鹿村では、幕末から明治にかけて村内に点在する神社やお堂の境内13ヶ所に芝居専用の舞台があったという記録が残っています。現在村内に7つの舞台が残っていますが、近年春・秋の定期公演でもっぱら使用されているのは、大磯神社の舞台(下市場)と市場神社の舞台(塩河)の2つです。いずれも間口六間・奥行き四間の舞台で、回り舞台があり、上手に太夫座が付設されています。急峻な山々に囲まれ過酷な暮らしの中で、当時わずか数十戸の集落に、これだけの舞台が造られたのは驚きです。



大磯神社の舞台(下市場)。



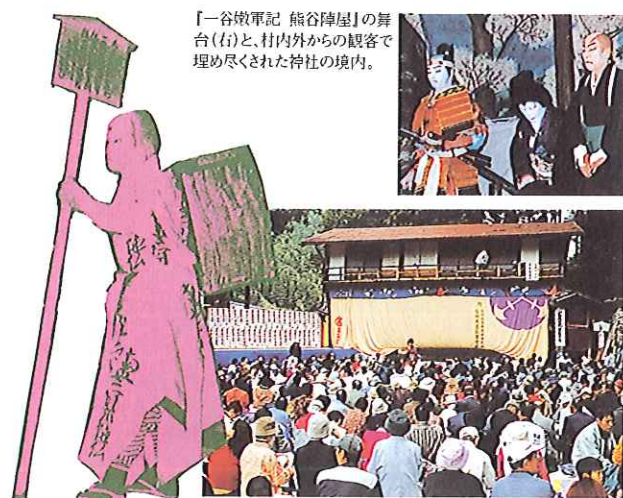
市場神社の舞台(塩河)。嘉永4年(1851)建立。



伝承の担い手の成長を願って、中学生の指導に当たる。

伝統を受け継ぐ——大鹿中学校歌舞伎クラブ

昭和50年に鹿塩中学校に誕生した歌舞伎クラブは、そのまま大鹿中学校に継承され、大鹿歌舞伎保存会の会員が指導に当たり、毎年秋にお年寄りを招いて上演を行っています。伝統芸能の伝承を通じて大鹿村の若き担い手たちが育っています。平成12年10月には、大鹿中学校の歌舞伎班の生徒12人が、50年近く上演されず「幻の外題」と呼ばれてきた「源平咲別躰躰 扇屋の段」を、大鹿歌舞伎保存会常務理事、片桐登さんの三味線に合わせて見事に上演しました。



「一谷嫩軍記 熊谷陣屋」の舞台(右)と、村内外からの観客で埋め尽くされた神社の境内。